

カミュにおける「兄」について

松本陽正

構成

1. 「裏と表」と *Le Premier Homme* における兄
2. 実生活における兄
3. 兄の代理

1

カミュには、リュシアンという名の4歳年上の一人の兄がいた。幼いカミュは母、兄とともに、ベルクール祖母の家に身を寄せ、そこで17歳まで、祖母や叔父と生活を共にしている。彼ら「家族」はさまざまな形でカミュの作品に影を落とすこととなる。処女作「裏と表」から遺稿 *Le Premier Homme* にかけて、母、祖母、叔父像の変遷には聖家族への志向の増大が認められたが¹⁾、それでは、残る家族の一人、兄はどのような像を示しているのだろうか。

生前刊行されていた作品の中で、兄に対して個別に言及がなされていたのは、「裏と表」の巻頭を飾る「皮肉」の第三番目の冒頭部、カミュの過ごした少年時代の家庭の姿が示されている場面だけだった。

Ils vivaient à cinq : la grand-mère, son fils cadet, sa fille aînée et les deux enfants de cette dernière. Le fils était presque muet; la fille, infirme, pensait difficilement, et, des deux enfants, l'un travaillait déjà dans une compagnie d'assurances quand le plus jeune poursuivait ses études. A soixante-dix ans, la grand-mère dominait encore tout ce monde. (II, 20)

『裏と表』所収の「皮肉」と「肯定と否定とのあいだ」において、兄は、弟とともに「二人の子供たち」〈les deux enfants〉(Ⅱ, 20, 21)、「子供たち」〈les enfants〉(Ⅱ, 21, 25)、「彼女の子供たち」〈ses enfants〉(Ⅱ, 25)、「彼女の孫たち」〈ses petits-fils〉(Ⅱ, 21)といった形でたびたび示されることはあっても、そこで問題となっていたのは弟のほうであり、『裏と表』においては、兄もすでにみた叔父同様、いわば黙殺された存在となっていた。だが、叔父が「さまざまな仮面をつけて」²⁾甥の作品を飾っていたのに対し、不思議なことに、『裏と表』以降の作品においては、主要登場人物に兄弟のいる人物はまったく見当たらないのである³⁾。

Le Premier Homme は、『裏と表』以来、初めて兄に触れた作品である。とりわけ第一部においては、『裏と表』同様、弟とともに「彼女の子供たち」〈ses enfants〉、「子供たち」〈les enfants〉、「二人の子供たち」〈(les) deux enfants〉、「彼女の二人の子供たち」〈ses deux enfants〉、「彼女の孫たち」〈ses petits-enfants〉といったような形で、あるいはまた「彼の兄」〈son frère〉、「お前の兄ちゃん」〈ton frère〉とか「アンリ」といった言葉でたびたび兄に関する短い言及がなされている。しかしながら、兄が具体的に叙述されているのは、わずかに二箇所といってもよく、その場面を別にすれば、兄は黙殺されている印象を受けるのである。兄が描かれている二つの場面の問題については後述するとして、いまは二つの点に注目しておきたい。

まず第一点は、子供の頃のさまざまな遊びが活写されている第一部4章「子供の遊び」に兄は出てこないということである。つまり、兄は遊び友達には含まれていないのである。

第二点として、「過去」においてある意味で不在の兄は、語り手の「現在」に登場することもないということである⁴⁾。現実には、兄リュシアンは、母や叔父同様、アルジェにいたはずだが、母や叔父との再会が感動的に語られているのに対し、主人公が兄と再会することはない⁵⁾。

このように、*Le Premier Homme* においても兄は、『裏と表』同様、いわば黙殺された存在となっているのである。*Le Premier Homme* では、脚注にもある

ように、兄は「アンリ」と呼ばれたり、「ルイ」と呼ばれたりしていて、名前すら不統一になっている (PH, p.212参照)。もっとも、これはジャックや母や叔父やベルナル先生にもあてはまることであり、この点は兄軽視の根拠とはなるまい。しかしながら、これまた脚注にあるように、第一部1章では、当初は母に身を寄せ眠っていたはずの兄は、しばらくするとアルジュの祖母のもとに預けられているというふうに変わり (PH, p.12ならびに p.20参照)、主人公の聖なる誕生に同席することはない。カミュに推敲する時間があれば、もちろんこのような矛盾は消えたことだろうが、しかし、この第一部1章の聖書的世界からの兄排除には、兄軽視の態度が透けて見えるように思われるのである。

兄から受けた悪戯 (PH, pp.130-131参照) や兄の初聖体拝領の様子 (PH, p.155参照) 等が手短かに記されてあるくだけりもあるが、具体的に兄が描かれているのは、すでに述べたように、家庭コンサートと鶏を取りに行く二つの場面だけだろう。だが、そこに描かれた兄のイメージは淡く、弱いものとなっていて、ジャックの引き立て役でしかない印象を受ける。

まず、家庭コンサートの場面を見てみよう。ジャックが「かなりいい声」をしているのに対し、祖母に言われてヴァイオリンのレッスンを受けている兄は、「調子の狂ったヴァイオリンからいくつかひどい音を引き出し、そのヴァイオリンは「ジグザグに進」んでいく (PH, p.88 参照)。また、夜、中庭の鶏小屋から、鶏を取ってくるよう初めて命じられた兄は、「しりごみして、怖いと、はっきり口に出して」 (PH, 212) 言う。そしてその役回りは弟のジャックにくることとなる。このように兄は、音楽的才能も、勇気も持ち合わせていない人物として提示されているのである。

のみならず、兄弟の心の交流といったものは描かれてはいない。すでにみたように、第一部4章「子供の遊び」に兄は出てこず、ジャックの遊び友達に、兄は含まれてはいなかった。それどころか、二人の間に流れているのは、弟の兄に対する優越感であり、兄の弟に対する敵意である。ジャックがなんとか鶏を取ってくると、祖母は兄に、「この子はお前より年下なんだよ。恥ずかしい

じゃないか。」と言うのだが、その時、「兄は弟の方を見ずにデザートを食べているか、そうでなければ軽蔑したような顔をしてみせたが、かえてそれはジャックの満足感を一層増大させることに」(PH, 214) なる。兄は弟を無視するか、軽蔑する。弟は兄に対する優越感をかみしめている。祖母が鶏を殺すのに同席を強いられた後、食堂に帰ってきたジャックに、兄は次のように言う。

«Je ne peux pas voir ça, moi», lui avait dit son frère le premier soir avec une fureur rentrée.«C'est dégoûtant. – Mais non», disait Jacques d'une voix incertaine. Louis le regardait d'un air à la fois hostile et inquisiteur. Et Jacques se redressa. Il se referma sur l'angoisse, sur cette peur panique qui l'avait pris devant la nuit et l'épouvantable mort, trouvant dans l'orgueil, et dans l'orgueil seulement, une volonté de courage qui finit par lui servir de courage. «Tu as peur, voilà tout, finit-il par dire. (PH, 215)

このように兄の弟への敵意、弟の兄への優越感はあっても、兄弟愛はまったく描かれてはいないのである。のみならず、「兄アンリとの関係。喧嘩」(PH, 77) という欄外の加筆すらみづかり、カミュが兄弟喧嘩を描こうとしていたことさえわかる。このように、兄は「聖家族化」の方向性からただ一人外れているのである。

2

ところが、実際には、カミュは兄リュシアンとは仲がよかったようだ。

1958年、「お兄さんとの個人的な関係はどのようなものでしたか」とのヴィジニアニの質問に答えて、カミュは「僕たちはとても仲がいい」(Nous nous entendons très bien.) との証言を残している⁶⁾。

伝記作家たちの記述やカミュの「手帖」や手紙も、この証言を裏付けている。簡単に辿っておこう。

二人は、子供の頃も仲がよかったようだし、兄は弟を保護していたようだ⁷⁾。

シモーヌ・イエとの結婚に反対のアコー叔父から「最後通牒⁸⁾」を突きつけられ、叔父の家を出たカミュは⁹⁾、1933年7月、兄の家に身を寄せることとなる。兄は喜んで迎え入れてくれ¹⁰⁾、できうる限りカミュを援助している¹¹⁾。

1936年、シモーヌとの仲が破綻し、シモーヌの母マルト・ソグレルといった後ろ楯を失った時期にも、経済的に援助してもらっているし、そんなカミュを兄は心配して見守っている¹²⁾。

1950年、リュシアンは、南仏カブリで静養中のカミュを見舞い、手術後の療養をかねて、1か月滞在している¹³⁾。

アルジェに帰った折は、カミュは、母とともに兄にももちろん会っている。1956年1月22日「市民休戦への呼びかけ」の日には、リュシアンは会場に足を運んでいるし¹⁴⁾、カミュのボディ・ガードを務めたのは他ならぬリュシアンの二人の友人であった¹⁵⁾。

同年7月、戦争状態のアルジェに住む家族を案じたカミュは、母、エチエンヌ叔父それにリュシアンとその家族をパレルムに呼び寄せ、フランスの土地に順応させようと努めている (C3, p.189 参照)。

また、都市ゲリラが頻発していた1958年3月の帰国の折には、リュシアンは港までカミュを出迎えに来てもある¹⁶⁾。

1959年3月、カミュは母が手術を受けたとの電報を兄から受け、急遽アルジェに帰っている (C3, p.262参照)。二人が緊密に連絡を取り合っていたことは間違いない。

同年秋には、リュシアンは1週間の休暇をとって、*Le Premier Homme*の題材を得るため生地モンドヴィに赴くカミュに同行することになっていた¹⁷⁾。

1959年12月21日、母に宛てた手紙には、「エチエンヌ、リュシアンそれに家族みんなの幸せを祈ります¹⁸⁾」との追伸が添えられている。カミュが兄を家族の一員と考えていたことは疑いの余地がないことである。

カミュの通夜に列席したリュシアンは、葬式の日 (1月6日) には、カミュの父の「代理」グルニエとともにカミュの妻フランシーヌの腕をとり、付き添うこととなる¹⁹⁾。

カミュの伝記をみても、このように兄弟の交わりしかみえてこない。ただ、気になる事実が一つある。若きカミュも手紙を焼却したとのことだが²⁰⁾、リュシアン²¹⁾の娘リュシエンヌの証言によれば、リュシアンはカミュの手紙を焼いたという²¹⁾。理由は不明だが、気にかかる。

唯一の否定的証言とっては、1956年 3月27日のジャン・グルニエの『手帖』に見られる次のような記述である。

Camus : à Palerme (près de L' Isle-sur-Sorgue), propriété louée très cher pour loger sa famille pendant six mois, plus sa belle-famille. Le frère d'Albert Camus n'est pas invité à prendre le café avec nous (Napoléon comble sa famille mais institue une hiérarchie).²²⁾

なぜ兄がコーヒーを飲む折に呼ばれなかったのか。グルニエはそこにカミュの「序列」つまり兄に対する一種の差別意識をみている。だがこれととも、「知識人ではない」²³⁾ 兄に対し、グルニエと同席させ気まずい思いをさすまいという弟の配慮だったのかもしれない。

なぜ仲のよかった兄の姿がカミュの作品にみられぬのか、また *Le Premier Homme* において初めて具体的に描かれた兄が何故ただ一人聖家族に組み入れられていないのか。 *Le Premier Homme* 以前の作品群における兄の不在や *Le Premier Homme* における否定像という現象は指摘できても、その理由を明快に説明付けることには困難さがつきまとう。一つの可能性としては、ブルーストの作品における弟の不在と同じ理由があげられるかもしれない。鈴木道彦氏は、「仲のよい兄弟と思われていた」弟が、ブルーストの作品においては抹殺されている理由を、「お寝みの接吻」を妨害する「第三者のそもそもの原型」は「自分が二歳にも満たぬときにとつぜん出現した弟ロベール」に他ならないとし、「空想のなかで（だれしものやるように）何度か弟のない自分を想定した」ブルーストがそのような「空想を実現した」ためだとする、鋭い見解を提示されている²⁴⁾。ブルーストの場合は弟であり、カミュの場合は四歳年上の

兄という違いがあるとはいえ、カミュにとっての母のもつ意味を考える時、母を独占したいという「空想」が兄の不在や否定像の理由になっていると考えることも可能かもしれない。

3

今述べたことはあくまでも仮説であるが、ただ、興味深い事実を一つ指摘できる。*Le Premier Homme* においては、ベルナル先生やヴィクトール・マランやあるいはエチエンヌ叔父が父の代理となっているように、兄にも「代理」がいるのである。*Le Premier Homme* の中では、兄の役回りを担っているのは、実の兄ではなく、ピエールである。いわば、ピエールが、兄の代理となっているのである。

ピエールは²⁵⁾、作品の中ではまず幼なじみ、遊び友達として紹介されている。4章「子供の遊び」では、大嫌いな昼寝が終わるや、ジャックは遊び友達、「ピエールや他の仲間」《Pierre et les autres》(PH, 45) に会おうと走るのだが、ピエールだけがまず紹介されていることから、彼がジャックにとって、第一の友であることがよく伝わってくる。ついで、ピエールはジャックとともに遊びにたけた子供として紹介されるのだが、ジャックにとってピエールは単に第一の友にとどまらない。

ピエールには、ジャックの兄の代理としての側面が認められるのである。二人の出自は同じである。ジャックの母同様、ピエールの母もまた「戦争未亡人」であり、ベルクルの貧しい家庭に育った二人は²⁶⁾「その出自と運命とによって兄弟」《frères par l'origine et le destin》(PH, 131) なのである。ジャックよりも「ほぼ1歳年上であり」²⁷⁾、彼よりも「思慮深く、感情を表に出さぬ」ピエールは、「年長者の義務」(PH, 131) を意識している。二人は、幼稚園にいった最初の日から「大の仲良し」(PH, 131) になる。小学校にも一緒に通うし、すでに触れたように一緒によく遊ぶ。ジャックの「決闘」(donnades) (PH, 144) にももちろん立ち会う。ベルナル先生の補習も一緒に受け、奨学生試験にも共に合格する。「未知の世界」(PH, 163, 186) であ

るリセへと飛び出す朝、電車の中でジャックは、不安に駆られながらも、「ピエールの兄弟のような肩」《l'épaule fraternelle de Pierre》(PH, 186) が寄り添うのを感じるのであった。確かに、リセは「未知の世界」であった。しかし、ジャックにはピエールが、ピエールにはジャックがいたのである。

En vérité, personne ne pouvait les conseiller. Pierre et lui s'aperçurent très vite qu'ils étaient seuls. (PH, 186)

リセに通い始めてからも、ジャックがサッカーをするときだけは別行動だが (PH, p.206参照)、それ以外は、教室では「並んで座って」(PH, 207) 授業を受け、ジャックが「休日登校」(PH, 217) させられぬ限り木曜日には一緒に傷痍軍人センターに遊びにいくし、私立図書館にも一緒に通い、二人は時を共有する。リセへの登・下校、リセでの生活を描いた第二部「リセ」では、他の上流階級の子供たちと区別するかのように、二人は「二人の子供たち」《les deux enfants》(PH, 204, 205) で示されている²⁸⁾。すでに述べたように、第一部ではジャックは兄と共に「子供たち」で示されることが多かったが、第二部「木曜日とヴァカンス」になると、今度は、兄に代わるかのように²⁹⁾、ピエールが、ジャックと共に、「二人の子供たち」《les deux enfants》(PH, 218, 227)、「子供たち」《les enfants》(PH, 219-223)、「この子供たち」《ces enfants》(PH, p.227) で示される例が頻出することとなる³⁰⁾。

先程、ジャックとピエールの共通点として「出自」が同じことを指摘したが、ジャックはリセで知り合った友人ディディエに心引かれながらも、家族の歴史があり、フランスを「我が祖国」《notre patrie》(PH, 191) と呼ぶディディエには本質的な違いを覚えるのであった (PH, pp.191-192参照)。ジャックが一番心を寄せていたのは「自分に最もよく似ている者、つまりピエール」(PH, 193) なのであった。すでに別のところで論じたことがあるが、「父なるもの」を持たぬ二人は、ともに《premier homme》なのである³¹⁾。

だが、見落としてはならぬのは、二人の類似は単に「出自」によるものにと

どまらぬ点である。性格的には違いもあるが、「男」のモラル、高貴さへの志向といった価値を二人とも持っているのである。侮辱に耐えられず「決闘」を挑むジャック、その「決闘」には、すでに述べたようにピエールも立ち会うのであった。二人とも名誉や勇気を描いた本（「ランツレピッド」）を好むし、そんな二人は「二人の貴族」〈deux aristocrates〉（*PH*, 225）にたとえられている。二人は精神的な血筋が同じなのであり、このような二人に共通する精神的な貴族性を見落としてはなるまい³²⁾。

兄の代理、これはなにも *Le Premier Homme* に初めて現れた現象ではない。前作「追放と王国」所収の「ヨナ」においても、主人公ヨナには兄の代理がいた。それはラトーである。作品の冒頭部、ラトーは「献身的な兄」として紹介されていた。

Son malheur supposé valut enfin à Jonas un frère dévoué en la personne de son ami Rateau. (I, 1630)

「頑丈で」〈vigoureux〉、スポーツ好きなラトーは、「すでにその無頓着な成功ぶりに感心していた子供（ヨナ）を、自分の保護下に〈sous sa protection〉置きたいという気持ちをも」(I, 1630)（強調引用者）抱くのである。

ラトーのこの決意は変わらない。名声の増大とともに、ヨナは「弟子」や批評家たちに取り巻かれ、雑事に忙殺され、制作に集中することができなくなってくるが、そんなヨナにラトーは心からの忠告や援助を惜しまないし、画家にとって昼の光がもつ意味を知っているラトーは「夕食後でない」と（I, 1637）友の家を訪れようとはしない。ヨナの名声の失墜とともに、取り巻き連中は、ヨナを見捨て、徐々にヨナのアパルトマンを訪れなくなる。作品の結末部、ヨナが屋根裏部屋に閉じこもってからは、訪問客はなくなるが、「唯一人、ラトーだけは忠実にやってく」（I, 1652）る。夜毎、ラトーの別れの挨拶に、ヨナは「あばよ」〈Salut, vieux frère.〉（I, 1653）と言葉を返すのだが、この

「兄弟」(frère)という言葉は二人の関係をよく示してくれているのである³³⁾。

確かに、男同士の友情は、たとえば『異邦人』のムルソーとセレスト、『バスト』のリウーとタルー、『生い出ずる石』のダラストとコックといった形で、カミュの作品に見受けられたものであった。だが、兄の代理が明確に³⁴⁾カミュの作品を飾ったのは『ヨナ』が初めてのことである。すでにみたように、兄の代理は *Le Premier Homme* で一層押し進められるのだが、『ヨナ』における兄の代理の出現もまた、『追放と王国』が、*Le Premier Homme* への「移行過程」³⁵⁾の作品であることを象徴的に物語っているように思われるのである。

注

アルベール・カミュの以下の作品を次のように略記し、ページは括弧内に直接示す。

I : *Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, (Bibliothèque de la Pléiade), 1967.

II : *Essais*, Gallimard, (Bibliothèque de la Pléiade), 1965.

PH: *Le Premier Homme*, Gallimard, (Cahiers Albert Camus 7), 1994.

C3: *Carnets : mars 1951-décembre 1959*, Gallimard, 1989.

- 1) 拙稿, 「カミュの *Le Premier Homme* について」, 『広島大学文学部紀要』, 第54巻, 1994, pp.215-220, ならびに拙稿, 「カミュの作品にみる樽職人の叔父像の変遷」, 『広島大学文学部紀要』, 第56巻, 1996, pp.249-268を参照されたい。
- 2) Herbert R. LOTTMAN, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne VERON, Seuil, 1978, p.31. なお, ロットマンの訳については, 『伝記 アルベール・カミュ』, 大久保敏彦・石崎晴己訳, 清水弘文堂, 1982を参照させていただいた。
- 3) 祖母についても同様である。
- 4) 短い言及はみつかる。「子供たちが生活費を送ってくれていた」(ses fils subvenaient à ses besoins) (PH, 122) とはあるが, 登場することはない。なお, *Le Premier Homme* の訳については, 『最初の人間』, 大久保敏彦訳, 新潮社, 1996を参照させていただいた。
- 5) 兄リュシアンには, ポールとリュシエンヌという二人の娘がいた。作品の中の「女の子たち」(les petites) (PH, 77) や「彼女の孫娘たち」(ses petites-filles) (PH, 94) は兄の子供のことだろうが, この少女たちも登場することはない。
- 6) Carl A.VIGGIANI, *Notes pour le futur biographe d'Albert Camus in Albert Camus 1*, Minard, 1968, p.203.
- 7) (Lucien protège Albert. Ils partagent la boîte de coco à lécher, qui dessine des traces jaunes autour de la bouche.) (Olivier TODD, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, p.29.)

- 8) 《Notes》 par Marguerite DOBRENN in *Correspondance Albert Camus – Jean Grenier*, Gallimard, 1981, p.237.
- 9) Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.77, および *Correspondance Albert Camus – Jean Grenier*, *op. cit.*, pp.15-17, p.237 参照。
- 10) カミュはジャン・グルニエに次のように書き送っている。《Ecrivez-moi à l'adresse ci-dessus. C'est celle de mon frère qui a bien voulu m'accueillir.》(*Correspondance Albert Camus – Jean Grenier*, *op. cit.*, p.15.)
- 11) Olivier TODD, *op. cit.*, p.61 参照。
- 12) 《Depuis dix jours je n'ai même pas les 10 sous d'un timbre. Alors j'ai nommé mon frère secrétaire et comme ça il m'expédie ma correspondance.》Lucien s'inquiète pour Albert. (*Ibid.*, p.136.)
- 13) Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.490 参照。
- 14) *Ibid.*, p.582ならびに Olivier TODD, *op. cit.*, pp.626-627 参照。
- 15) Olivier TODD, *op. cit.*, p.626 参照。
- 16) Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.634 参照。
- 17) *Ibid.*, p.663 参照。
- 18) Olivier TODD, *op. cit.*, p.751.
- 19) Jean GRENIER, *Carnets*, Seghers, 1991, p.295 参照。
- 20) Marguerite DOBRENN, 《Avertissement》 in *Correspondance Albert Camus – Jean Grenier*, *op. cit.*, p.10 参照。
- 21) Olivier TODD, *op. cit.*, p. 823 参照。
- 22) Jean GRENIER, *Carnets*, *op. cit.*, p.187.
- 23) ヴィジアニに対し、カミュは兄について次のようにも述べている。《Ce n'est pas un intellectuel.》(Carl A.VIGGIANI, *op. cit.*, p.203.)
- 24) 鈴木道彦, 「不在の弟」, 「プルースト論考」所収, 筑摩書房, 1985, pp.47-48 参照。
- 25) ビエールのモデルはビエール・ファシナである。Olivier TODD, *op. cit.*, p.32 参照。
- 26) ビエールもまた, 二人の叔父と同居している。
- 27) ビエール・ファシナは1912年4月13日生まれである。Pierre LE BAUT, 《Nouvelle identification de "Pierre" l'ami de Jacques Cormery dans *Le Premier Homme*》, *Bulletin d'information*, N°42, janvier 1997, Société des études camusiennes, p.4.
- 28) 第一部にもその例はみつかると。PH, pp.131-132参照。
- 29) 第二部では, ジャックが兄とともに「子供たち」で示されるのは, わずか3例にすぎない。《ses enfants》(PH, 187) 《l'aîné des enfants》(PH, 212) 《ces enfants》(PH, 212)
- 30) もちろん, 「子供たち」《les enfants》が一般的な子供をさす例もある。PH, p.237 ならびに p.239参照。
- 31) 《premier homme》の概念については, 拙稿, 「アルベール・カミュにおける《男》について」, 「フランス語フランス文学研究」, N°67, 日本フランス語フランス文学会,

1995, pp.78-79を参照されたい。

- 32) カミュにおける名譽については、拙稿、〈Sur l'honneur chez Camus – nouvelle valeur dans *L'Etat de Siège*〉 in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, No60, 日本フランス語フランス文学会, 1992を参照されたい。
- 33) 伝記作家たちは一致して、ラトーのモデルはルネ・シャルルだとしている (Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.523 ならびに Olivier TODD, *op. cit.*, p.488 参照)。実生活において、カミュには友愛を覚える友は何人かいたが、わけても6歳年長のシャルルとは強い絆で結ばれていた。1956年6月、カミュはシャルルが2階に住むシャナレイユ通りのアパートマンの4階に仕事を構えることとなるし (Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, pp.588-589, Olivier TODD, *op. cit.*, p.666 ならびに Jean GRENIER, *Carnets, op. cit.*, p.228 参照), カミュがルールマランの地に引きつけられたのは、ジャン・グルニエの著作 (『それが見えるだけでもう……』) によるよりも、近く (ルール=シュール=ラ=ソルグ) にシャルルがいたためではないかとグルニエ自身述べているほどである (Jean GRENIER, *Carnets, op. cit.*, p.296 参照)。カミュはピエール・ベルジェ宛の手紙の中に「私が兄のように愛しているシャルル」(I, 2062) との言葉を残しているが、キーヨもいうように、カミュは「シャルルの内に兄を見出していた」(II, 1917) のである。マリニャンヌ空港で母と姪のリュシエンヌを迎えたカミュは、母にシャルルを次のように紹介したとのことである。「ママ、僕の兄貴さ、好きになってくれると思うよ。」(Maman, c'est mon frère, tu l'aimeras.) (Olivier TODD, *op. cit.*, p.485.)
- 34) リウーがタルーを「兄弟のように」(fraternel) (I, 1323) 感じるように、リウーとタルーの間には友愛が認められるが、いずれか一方が兄の代理になっているとは断定しがたい。
- 35) Franck JOTTERAND, «Entretien avec Albert Camus», *la Gazette de Lausanne*, 27-28 mars, 1954, p.9. 「追放と王国」が *Le Premier Homme* への「移行過程」の作品であることについては、拙稿、「『追放と王国』にみられる *Le Premier Homme* の影」, 『フランス文学研究』, 第15号, 広島大学フランス文学研究会, 1996, pp.23-39を参照されたい。

Sur le frère aîné d'Albert Camus

Yosei MATSUMOTO

Camus avait un frère aîné, appelé Lucien. Mais il n'a fait qu'une petite mention de lui dans sa première œuvre *l'Envers et l'Endroit* et après, le frère, contrairement à l'oncle Etienne, n'apparaîtra jamais plus dans les œuvres d'Albert Camus.

Dans *le Premier Homme*, cependant, manuscrit de Camus longtemps resté inédit, le héros Jacques a un frère nommé Henri. Mais le portrait de ce dernier n'apparaît pas du tout sous un jour positif comme celui de l'oncle Etienne : il n'y a pas de scènes où les deux frères jouent ensemble. De plus, non seulement le frère aîné a une sorte de haine contre son cadet, mais il ne tient même pas compte de son existence. De son côté, le plus jeune se croit supérieur à son frère aîné.

Pourtant, dans la vie réelle, Camus et son frère s'entendaient bien comme Camus l'atteste lui-même ainsi que ses biographes. Alors pourquoi ne peut-on pas trouver de traces de cette relation fraternelle dans les œuvres de Camus? Du moment qu'il n'y en a pas, on ne pourra pas éclaircir ce mystère, mais on peut faire remarquer quand même un phénomène étrange. De même qu'il existe des substituts du père dans *le Premier Homme*, il y a un substitut du frère dans cet ouvrage posthume. Il s'agit de ⟨Pierre, d'un an et presque plus âgé que lui⟩: Pierre, ami d'enfance de Jacques, le protège. Ils partagent leur vie d'enfant et ils partiront seuls pour un monde inconnu : le lycée ; tous les deux orphelins de guerre, ils sont ⟨frères par l'origine et le destin⟩. Il faut rappeler à cette occasion que le substitut du frère a déjà fait une apparition dans *Jonas*, nouvelle

autobiographique, où Rateau, dont le modèle est René Char, a rempli le rôle du protecteur et du frère aîné de Jonas. Ainsi, à la place du frère réel, les substituts du frère jouent un rôle très important dans les derniers ouvrages d'Albert Camus.